

平成 30 年 9 月 5 日現在

機関番号：33708

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25463584

研究課題名(和文) グループ回想法いきいき感尺度の開発と高齢者のいきいき感を引き出す実践内容の構造化

研究課題名(英文) Development of group reminiscence activeness scale and practice contents to extract active feeling of elderly

研究代表者

内野 聖子 (Uchino, Seiko)

岐阜医療科学大学・保健科学部・教授

研究者番号：00348096

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、グループ回想法に参加した認知症高齢者のいきいきした参加状況を客観的に評価できるグループ回想法いきいき感尺度を開発し、いきいき感を最大限引き出す実施者の実践内容を抽出することである。グループ回想法実施場面の観察調査結果からグループ回想法いきいき感尺度を開発し、信頼性と妥当性を検証した。また、熟練認知症高齢者ケア実践者から協力を得て、いきいき感が引き出される実践内容を質的記述的分析で抽出した。

【会に感情豊かに参加し、人間力を発揮する】等の3カテゴリ、28項目の尺度が開発された。いきいき感が引き出される実践内容として高齢者の思いや持てる力を活かし、実施環境調整すること等が示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop a group reminiscence activeness scale that objectively evaluates the active participation status of the dementia elderly who participate in group reminiscence, and extract practice contents of an enforcer to draw out feeling of activeness to the maximum.

The authors have developed a group reminiscence activeness scale from the observation results of the group reminiscence practice scene and verified its reliability and validity. Further, practice contents by which feeling of activeness is drawn was extracted by a qualitative descriptive analysis with cooperation from experts in the field of dementia elderly care.

Three categories including [participate in the meeting highly emotionally and demonstrate vitality] and a scale with 28 items were developed. As a practice content that draws out feeling of activeness, coordination of environment for the practice for which thoughts and abilities of elderly has been indicated.

研究分野：老年看護学

キーワード：グループ回想法 認知症高齢者 いきいき感 尺度開発 観察調査

1. 研究開始当初の背景

認知症高齢者への取り組みの一つとして、回想法や音楽療法等の非薬物療法が行われている。回想法は1960年初頭にR. N. Butlerにより提唱された¹⁾。この手法は治療的意義が示され、認知症の有無にかかわらず幅広い対象者に実施されており、認知症予防、閉じこもり予防を目的として行われることもある。回想法はリアリティーオリエンテーション等の類似する非薬物療法と比較され、それらの違いが明確になりつつある。回想法の効果として、高齢者や家族への効果、ケアスタッフへの効果、回想法を用いた認知症教育プログラムの効果等が報告されている。

参加高齢者の笑顔やいきいきとした様子は何物にも代えがたく、このような効果の持続により不安が軽減され、認知症悪化予防の可能性があると考える。認知症には尊厳保持できるように相手を尊重するなどのパーソンセンタードケアが望ましく、回想法においても参加する認知症高齢者の意思や思い、価値観等に重点を置いた実践や効果評価が求められる。高齢者の意思、価値観などが根底にあるいきいき感に重点を置いて高齢者を評価できれば、高齢者の満足感が向上する回想法実践につながり、回想法実施者の意欲向上がさらに望める。しかし、現状では、既存の評価尺度結果とともに詳細に記録をしながら効果評価しており、その状況は実施者の負担や負担感を増加させる可能性がある。そして、回想法における高齢者のいきいき感をとらえながら客観的に評価する既存の尺度はない。

内野は回想法に全8回の内4回以上参加したケアスタッフの認知症高齢者ケアにおける対応困難度が軽減したと研究報告しており²⁾、ケア能力が向上した可能性があると考え。さらに、内野らはグループ回想法の実施者へ的高齢者ケアにおける効果³⁾や具体的な回想法実践能力に関する研究⁴⁾を報告している。また、回想法の実施方法や配慮点はマニュアルや研究報告で提示されているが、回想法における認知症高齢者のいきいき感を引き出す実施者の実践内容は明確にされていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、グループ回想法に参加した認知症高齢者のいきいきした参加状況を客観的に評価できるグループ回想法いきいき感尺度を開発し、高齢者のいきいき感を最大限引き出す実施者の実践内容を抽出することである。

3. 研究の方法

<グループ回想法の実施方法>

- 1)対象者：認知症高齢者
- 2)実施状況：毎週同じ曜日で週に1回、午後の時間で、1クール8回で実施した。

- 3)実施者(リーダーおよびコ・リーダー)：回想法トレーナー養成講座を受講し、回想法実践を積み重ねてきた者がリーダーを担い、回想法の経験者がコ・リーダーとしてリーダーをサポートした。

<グループ回想法いきいき感尺度の開発>

- 1)対象者：認知症高齢者
- 2)実施場所
高齢者福祉施設内の一室
- 3)実施方法
認知症高齢者、回想法実践者に説明をして了解を得た上で、グループ回想法実施場面を録画した。録画された回想法実施場面を観察し認知症高齢者の参加状況を把握した。グループ回想法いきいき感尺度の各項目について、リッカート尺度1「全くみられない」、2「あまりみられない」、3「どちらともいえない」、4「ややみられる」、5「かなりみられる」の5段階を設定した。

4)分析方法

録画されたデータから逐語録を作成した。グループ回想法実施場面における言語的関わり方の逐語録について、データの文脈と意味を大切にしながら妥当な推論を行う内容分析の手法を参考にして質的記述的分析を行い、認知症高齢者の動作内容も含めて分析した。研究目的と合致する「高齢者のいきいき感」に関連する文章を抽出し、意味内容の類似性に基づきカテゴリ化した。質的研究方法の経験者、回想法や老年看護の専門家から協力を得ながら複数回検討し、カテゴリ名や尺度の項目の内容を検討した。

<グループ回想法いきいき感尺度の信頼性および妥当性の検討>

- 1)対象者
認知症高齢者
- 2)実施場所
高齢者福祉施設内一室もしくは研究室等の鍵のかかる部屋
- 3)実施方法
本研究で行った回想法実施場面を録画したデータを用いて観察調査し、「グループ回想法いきいき感尺度」を用いて参加高齢者を評価した。評価には、回想法の実践を積み重ねている熟練回想法実践者3名から協力を得た。
(1)回想法に参加した高齢者の基本属性：年齢、性別、疾患、症状を調査した。
(2)熟練回想法実践者3名から協力を得て、回想法観察評価尺度⁵⁾や生活健康スケール⁶⁾という類似した内容の尺度を用いて観察調査し、グループ回想法いきいき感尺度の結果と比較した。

4) 分析方法

基本属性について単純集計を行った。分布の著しい偏り(天井効果・床効果)を確認し、Item-Total Correlation Analysis(以下、I-T分析とする)による相関係数が0.4未満の全体得点と相関が低い項目を検討した。

また、グループ回想法いきいき感尺度の総得点および下位項目ごとにクローンバック係数を算出し尺度の信頼性を検討した。

グループ回想法いきいき感尺度の総得点と類似する内容の尺度の総得点との関連性について、Spearman順位相関係数を算出し基準関連妥当性を検討した。そして、観察者3名による結果を用いてケンドール一致係数を算出し、評価者間信頼性を検討した。なお、分析にはSPSS20.0を使用した。

<高齢者のいきいき感が引き出された場面における実施者の実践内容の抽出>

1) 実施方法

本研究で行った回想法実施場面を録画したデータを用いて、5.「かなり見られる」が「グループ回想法いきいき感尺度」の各項目でより多くの参加高齢者で示された回想法実施場面を抽出した。認知症高齢者ケアの教育的関わりや人材育成を行う熟練認知症高齢者ケア実践者に協力を得ながら、観察調査結果からいきいき感が引き出される実践内容について抽出した。

2) 分析方法

録画データの観察調査結果から、高齢者のいきいき感が引き出された回想法実施場面における実践内容を抽出しカテゴリ化を行い、質的記述的分析を行った。質的研究の専門家とともに複数回検討した。

<倫理的配慮>

研究実施前に研究施設への口頭および文書による研究説明し管理職者に許可を得て、倫理審査委員会に相当する会議にて研究の承認を受けて行った。また、対象者(高齢者とその家族、回想法実施者)に対し研究の目的・方法、研究への自由参加、不参加でも不利益がないこと、匿名性の遵守、データ管理の徹底、秘密の厳守、研究終了後データは破棄されることを口頭と文書で説明し、同意書により承諾を得た。なお、本研究は岐阜医療科学大学研究倫理委員会の承認(承認番号:27-11)、国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認(承認番号:13P-4)を得て行った。

4. 研究成果

<グループ回想法いきいき感尺度の開発>

本研究では、グループ回想法場面を録画し、それを観察調査した結果および回想法に関する文献を参考にしながら尺度開発を試みた。

グループ回想法に参加した認知症高齢者のいきいき感として、31項目が抽出された。

また、【必要時サポートを受け、状況を踏まえた会話力を発揮する】、【人とともに生き、社会性を発揮する】、【会に感情豊かに参加し、人間力を発揮する】の3カテゴリが抽出された。グループ回想法いきいき感尺度では、この3カテゴリを下位尺度とした。

【必要時サポートを受け、状況を踏まえた会話力を発揮する】

1. 質問や声かけに対して答える
2. 聞き取れなかったことを伝える
3. 伝えたいことを反復してお話する
4. その場の展開に合わなくても、答えを導いてお話する
5. 質問や声かけに対して同意することで、思い出したことをお話する
6. 思い出せないことや思い出したことについて表現する
7. 自分の理解しやすい言葉に変えてお話する
8. 質問や声かけに対して、意思表示を明確にする
9. 心身の状況により会の途中で移動する
【人とともに生き、社会性を発揮する】
10. 参加者に対して挨拶する
11. 参加者とともに歌う
12. 参加者とともに拍手する
13. 参加者とともに共感する
14. 参加者に対して気遣う
15. 参加者を褒めたり感謝の気持ちを表現する
16. 参加者に対して具体的に質問したり確認したりする
17. 参加者に話しかけることで、自分に惹きつける
【会に感情豊かに参加し、人間力を発揮する】
18. 思い出しながら、飲食物や味付け、食べ方についてお話する
19. 思い出しながら、昔の仕事についてお話する
20. 思い出しながら、一生懸命に取り組んだことをお話する
21. 思い出しながら、家族についてお話する
22. 思い出しながら、他者とともに協力したことについてお話する
23. 思い出したことを具体的に語って会に参加する
24. 本人が考える事実をしっかりと伝える
25. 生きてきた過程の中で培った生きる知恵についてお話する
26. 未来への希望をお話する
27. 今と昔を比較してお話する
28. ジェスチャーを用いて表現する
29. 参加者のお話しや道具に集中して関心を向ける
30. 表情豊かに快感情を表現する
31. 表情豊かに残念な感情を表現する

<グループ回想法いきいき感尺度の信頼性と妥当性の検討>

回想法参加高齢者は28名で、年齢は80歳代が13名でもっとも多く、90歳代が12名、70歳代2名、60歳代1名であり、女性22名、男性6名であった。

分布の著しい偏り(天井効果・床効果)は、多くの項目で確認されたが、その後の分析を進めて検討することとした。観察者3名とともに、I-T分析による全体得点との相関係数が0.4未満の相関が低い項目は、「9.心身の状況により会の途中で移動する」、「10.参加者に対して挨拶する」、「12.参加者とともに拍手する」の3項目であった。この3項目は、グループ回想法いきいき感尺度の項目から削除することとした。よって、グループ回想法いきいき感尺度は最終的に28項目となった。

グループ回想法いきいき感尺度の総得点のクロンバック係数は、観察者3名とともに回想法の前半と後半ともに0.7以上であり、信頼性があることを確認した。しかし、下位尺度毎にみたときには、極端に信頼性が低いものもあった。

また、グループ回想法いきいき感尺度と類似した内容の尺度との相関係数を見てみると、回想法の前半と後半ともに、3名の観察調査結果ではほとんどの項目で「やや相関がある」、「かなり強い相関がある」という結果であった。

そして、グループ回想法いきいき感尺度を用いて観察調査した結果、回想法の前半と後半のいずれかにおいて、3名の観察調査者のケンドール一致係数が0.4以上であったのは20項目であった。

<グループ回想法いきいき感尺度>

本研究で開発されたグループ回想法いきいき感尺度(28項目、3つの下位尺度)を以下に示す。

【必要時サポートを受け、状況を踏まえた会話力を発揮する】

1. 質問や声かけに対して答える
2. 聞き取れなかったことを伝える
3. 伝えたいことを反復してお話する
4. その場の展開に合わなくても、答えを導いてお話する
5. 質問や声かけに対して同意することで、思い出したことをお話する
6. 思い出せないことや思い出したことについて表現する
7. 自分の理解しやすい言葉に変えてお話する
8. 質問や声かけに対して、意思表示を明確にする

【人とともに生き、社会性を発揮する】

9. 参加者とともに歌う
10. 参加者とともに共感する
11. 参加者に対して気遣う

12. 参加者を褒めたり感謝の気持ちを表現する

13. 参加者に対して具体的に質問したり確認したりする

14. 参加者に話しかけることで、自分に惹きつける

【会に感情豊かに参加し、人間力を発揮する】

15. 思い出しながら、飲食物や味付け、食べ方についてお話する

16. 思い出しながら、昔の仕事についてお話する

17. 思い出しながら、一生懸命に取り組んだことをお話する

18. 思い出しながら、家族についてお話する

19. 思い出しながら、他者とともに協力したことについてお話する

20. 思い出したことを具体的に語って会に参加する

21. 本人が考える事実をしっかりと伝える

22. 生きてきた過程の中で培った生きる知恵についてお話する

23. 未来への希望をお話する

24. 今と昔を比較してお話する

25. ジェスチャーを用いて表現する

26. 参加者のお話しや道具に集中して関心を向ける

27. 表情豊かに快感情を表現する

28. 表情豊かに残念な感情を表現する

<高齢者のいきいき感が引き出された場面における実施者の実践内容の抽出>

熟練認知症高齢者ケアスタッフとともに検討した結果、高齢者のいきいき感を引き出す実践内容では、【回想法の有効な活かし方を考慮した実践】、【高齢者の思いや持てる力に配慮した実践】、【実施環境調整を熟慮した実践】の3カテゴリが抽出された。

5. 考察

28項目のグループ回想法いきいき感尺度が開発された。この尺度には開発過程で抽出された【必要時サポートを受け、状況を踏まえた会話力を発揮する】、【人とともに生き、社会性を発揮する】、【会に感情豊かに参加し、人間力を発揮する】という3つのカテゴリが下位尺度として設定された。いきいき回想法に参加する状況として、高齢者の持てる力、社会性、感情豊かに参加していることがグループ回想法いきいき感尺度の内容に反映され、これらが回想法に参加している高齢者の評価の視点として示された。

今後、尺度全体、一つ一つの項目をとらえやすいように現場で活用しやすいよう詳細な内容のマニュアルを準備するなどの工夫をする必要がある。さらに、回想法実践のための研修とともに、効果評価の視点を学ぶ研修や学習の機会を提供することも重要であると考えられる。

また、いきいき感が引き出される実践内容として認知症高齢者ケアにつなげ、高齢者の思いや持てる力を活かし、実施環境調整することが示された。これらを実現するため、回想法の実践を認知症高齢者ケア実践につなげることができるように、具体的なケアプログラム開発や研修会の機会を提供することが必要であると考えられる。

<引用文献>

- 1) Robert N. Butler .: The Life Review : An Interpretation of Reminiscence in the Aged , Psychiatry 26 , 65-76 , 1963 .
- 2) 内野聖子：認知症高齢者を対象にして行ったグループ回想法に参加したケアスタッフのストレスマネジメント効果 ～参加回数別に見たケアスタッフのバーンアウトとコーピング状況の変化を中心として～、お茶の水医学雑誌 55(4), 55-76, 2007 .
- 3) 内野聖子, 浅川典子, 橋本志麻子, 三好理恵：グループ回想法を実施したケアスタッフへの高齢者ケア実践における効果, 日本認知症ケア学会誌 10(1), 68-78, 2011 .
- 4) 内野聖子, 浅川典子, 橋本志麻子, 三好理恵：実施者が発揮しているグループ回想法実践能力, 日本認知症ケア学会誌 11(2), 551-562, 2012 .
- 5) 小海宏之, 岡村香織, 岸川雄介, ほか：回想法観察評価尺度作成の試み, 老年精神医学雑誌 19(1), 61-69, 2008 .
- 6) 中島紀恵子, 工藤禎子, 尾崎新, ほか：デイケアにおける痴呆性老人に対する生活健康スケール作成の試み, 老年社会学 36, 39-49, 1992 .

6. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

内野聖子, 小澤美和：グループ回想法いきいき感尺度の開発と高齢者のいきいき感を引き出す実践内容, 岐阜医療科学大学紀要 第12号, 43-55, 2018 .

〔学会発表〕(計1件)

内野聖子：観察調査によって抽出されたグループ回想法に参加した認知症高齢者のいきいき感, 第37回日本看護科学学会講演集, 583-584, 2017 (仙台) .

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計0件)

取得状況 (計0件)

〔その他〕

ホームページ等

7. 研究組織

(1) 研究代表者

内野 聖子 (UCHINO Seiko)
岐阜医療科学大学・保健科学部・教授
研究者番号：00348096

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者 (五十音順)

石川 恭平 (ISHIKAWA Kyohei)
シニア・レミニス

梅原 里実 (UMEHARA Satomi)
JCHO 湯河原病院 / 高崎健康福祉大学看護実践センター

小澤 美和 (OZAWA Miwa)
松蔭大学看護学部看護学科

後藤 孝子 (GOTO Takako)
グループホームきらら日吉

仙田 里美 (SENDA Satomi)
グループホーム星川園

高村 夢香 (TAKAMURA Yuka)
岐阜医療科学大学保健科学部看護学科

野中 恭子 (NONAKA Kyoko)
グループホームきらら日吉

原岡 貞代 (HARAOKA Sadayo)
回想法・ライフレビュー研究会

藤吉 恵美 (FUJIYOSHI Emi)
岐阜医療科学大学保健科学部看護学科

古山 昇志 (HURUYAMA Shoji)
特別養護老人ホーム安立荘

室井 和子 (MUROI Kazuko)
シニア・レミニス

森山 恵美 (MORIYAMA Emi)
松蔭大学看護学部看護学科

山口 容平 (YAMAGUCHI Yohei)
小規模多機能型居宅介護 鶴亀

山本 忠弘 (YAMAMOTO Tadahiro)
グループホーム青葉台

渡邊 美幸 (WATANABE Miyuki)
岐阜医療科学大学保健科学部看護学科